

# 遍路

斎藤茂吉

青空文庫



那智なちには勝浦かつうらから馬車に乗って行った。昇り口のところに著ついたときに豪雨が降って来たので、そこでしばらく休み、すつかりあまし雨装束ようぞくに準備して滝の方へ上って行った。滝は華嚴けげんよりも規模は小さいが、思ったよりも好かった。石いし畳たたみの道をのぼって行くと僕は息切れいきぎれがした。

さてこれから船見峠ふなみとうげ、大雲取おおくもとりを越えて小口の宿まで行こうとするのであるが、僕に行けるかどうかという懸念があるくらいであった。那智権現なちごんげんに参拝し、今度の行程について祈願をした。そこを出て来て、小さい寺の庫裡口くりぐちのようなところに、「魚商人門内通行禁」と書いてあり、その側に、「うをうる人とほりぬけ

ならん」と註してあつた。

滝見屋たきみやというところで、腹はらをこしらえ、弁当を用意し、先達せんだつを雇つていよいよ出発したが、この山越やまごえは僕には非常に難儀なものであつた。いにしえの「熊野道くまのみち」であるから、石が敷いてあるが、今は全く荒廢して雑草が道を埋めてしまつている。T君は平家へいけの盛さかんな時の事を話し、清盛きよもりが熊野路からすぐ引返したことなども話してくれた。僕は一足ごとに汗を道におとした。それでも、山をのぼりつめて、くだりになろうというところに腰をおろして弁当を食いはじめた。道に溢あふれて流れている水に口づけて飲んだり、梅干の種を向うの笹藪ささやぶに投げたりして、出来るだけ

長く休む方が楽であつた。

そこに一人の遍路へんろが通りかかる。遍路は今日小口の宿を立つて那智へ越えるのであるが、今はこういう山道を越える者などは殆ど絶えて、僕らのこの旅行などもむしろ酔興すいきようにおもえるのに、遍路は実際ただひとりしてこういう道を歩くのであつた。遍路をそこに呼止め、いろいろ話していると、この年老いた遍路は信濃しなのの国諏訪郡すわのものであつた。T君はあの辺の地理に精くわしいので、直ぐ遍路の村を知ることが出来た。しかしこの遍路は一生こうして諸国を遍歴へんれきしてどこの国で果てるか分からぬというのではなかつた。国くにには妻もあり子もあつたが、信心のためにこうして他国の山中をも歩き、今日は那智を参拝して、追々帰国しようとい

うのであるから前途はそう艱難かんなんではなかつた。T君は朝鮮飴一切れを出して遍路にやった。遍路はそれを押しただき、それを食べるかと思うと、胸に懸かけてある袋の中に丁寧ていねいにしまった。

僕などは、この遍路からたいへん勇気づけられたと謂いつていい、そうして遂に大雲取も越えて小口の宿に著いたのであつた。実際日本は末世まっせになつても、こういう種類の人間もいるのである。遍路は無論、罪を犯して逃げまわっている者などではなかつた。遍路のはいている護謨底ごむそこの足袋たびを褒ほめると、「どうしまして、これは草鞋わらじよりか倍も草臥くたびれる。ただ草鞋では金が要いつて敵かいましねえから」というのであつた。これは大正十四年八月七日のことであ

る。

一いちやあ夜明けて、僕らは小口の宿を立つて小雲取の峰越をし、熊野  
本宮ほんぐうに出ようというのである。そこでまた先達を新規に雇った。  
川を渡ったりしてそろそろのぼりになりかけると、細こまかい雨が降つ  
て来た。僕らはしばし休んで合羽かっぱを身に著つけはじめた。その時遥向はるか  
うの峠を人が一人のぼって行くのが見える。やはり此方こつちの道は今  
でも通る者がいるらしいなどと話合いながら息を切らし切らし上  
って行った。

三十分もかかって、ようやく一つの坂をのぼりつめるとそこで  
一段落がつく。そこに一人の遍路が休んでいた。さっきの雨が既

にあがっているので遍路は莫蔭ごぎを敷いてそのうえで刻煙草きとみたばこを吸っていた。見晴らしが好く、雲がしきりに動いている山々も眼下になり、その間を川が流れて、その川原に牛のいるのなども見えている。

僕らもそこで暫時ざんじ休んだ。遍路は昨日のと違って未だ若い青年である。先ほど見た一人の旅人たびびとはこの遍路であつたのだから、遍路はかれこれ三十分も此処ここに休んでいるのであつた。遍路は眼が悪いということをいった。なるほど彼の眼は一眼がん全く濁り、片方の瞳ひとみにも雲がかかつていた。遍路の話を聴くに、もとは大阪の職人であつた。相当に腕が利きいたので暮しに事を欠くということがなかつたのだが、ふと眼めを患わづらつて殆ど失明するまでになつた。

そこで慌あわてて大阪医科大学の療治を乞うたけれども奈何いかにも思わしくない、そのうち一眼がんはつぶれてしまった。それのみではなく、片方の眼もそろそろ見えなくなつて来た。彼はせつぱつまつて思あげくい悩んだ揚句、全く浮世を棄てて神仏にすがり四国遍路を思立つた。然しかるに、居きよ処しよ不定ふじようの身となり靈場を巡めぐっているうちに、片方の眼が少しずつ見えるようになって来た。彼はますます神仏にすがつて到頭四国の遍路をおえた。その時には眼がよほど好く見えるようになった。

その時彼は、もうこれぐらいで沢山である。もうそろそろ信心の方も見きりをつけて浮世しごとの為事しごとをして見ようと思つたそうである。そしてしゆんじゆん逡巡しゆんじゆんしているうちに、眼は二たび霞かすんで来てもと

のようになりかけたそうである。

彼は驚き心を決して二たび遍路の身になつてしまつた。そして既に数年を経た。きようは小口の宿を立つて熊野の方へ越えようとしてゐるのだと、こういうのであつた。

彼はそういう事を事こまかに大阪弁おおさかべんで話した。しかし僕は大阪弁を写生することが得手えてでないから、そのまま書くことが出来ない。

遍路は、けれども現在の状態に安住してはいなかつた。若い身み空ぞらを働はたらきもせず、現世げんぜの慾望をも満たそうともせずにいることが残念でならなかつた。彼は「いまましい」という言葉を使つた。T君は遍路に五十銭くれたが遠慮をしながら丁寧ていねいにそれをしまつ

た。それから遍路はM君のくれた紙巻煙草を一本その場で吸った。僕は遍路をそこに残して一足先に出発した。一山巡ひとやまめぐつて、も一つ山にさしかかろうとする頃うしろの方で鈴の音が幽かすかに聞こえていた。

「奴やつも歩き出したね」

「あの奴なかなか面白いね。ぷりぷりいつているところなんか面白いじゃないですか」

「いまいましいなんていいましたね」

「いまいましくても、遁世とんせいの実行家だね。あれだけの生活は加かとりつくときようと  
特利教徒との労働者なんかでは出来ないよ」

「強しいられた実行なんですね」

「そうかも知れない。しかし観かんの音のん力りきにすぎるところに盲目的な

強味があるとおもいますね。一時流行した覚めた人間にはああい

う苦く行ぎ生せい活かつは到底出来ませんよ」

「しかしみんな遁とん生しょう菩ぼ提だいでも困りますからね」

「そうかも知れない」

僕らは疲れきって熊野本宮に著いたのは午後二時ごろであつた。そこで熊野権現に参拝した。熊野川は藍に澄んで目前を流れている。きよようの途中に、山峡からたまたま熊野川が見え出し、発動機船の鋭い音が山にこだまさせながら聞こえていたが、あれも山水に新しい気持を起させた。

この山越は僕にとつても不思議な旅で、これは全くT君の励ま  
しによつた。しかも偶然二人の遍路に会つて随分と慰安を得た。  
なぜかというに僕は昨冬、火難かなんに遭つて以来、全く前途の光こうみよ  
明うを失つていたからである。すなわち当時の僕の感傷主義は、  
曇つた眼一つでとぼとぼと深山しんざん幽谷ゆうこくを歩む一人の遍路を忘却  
し難かつたのである。しかもそれは近代主義的遍路であつたから  
であろうか、僕自身にもよく分らない。



# 青空文庫情報

底本：「山の旅 大正・昭和篇」岩波文庫、岩波書店

2003（平成15）年11月14日第1刷発行

2007（平成19）年8月6日第5刷発行

底本の親本：「時事新報」

1928（昭和3）年2月10日～13日

初出：「時事新報」

1928（昭和3）年2月10日～13日

入力：川山隆

校正：門田裕志

2009年6月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 遍路

斎藤茂吉

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>